

平成30年6月12日現在

機関番号：34310

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2013～2017

課題番号：25511017

研究課題名(和文) 西欧文化の日本での受容・変容・再発信の過程 文学における幻想性・怪奇性を中心に

研究課題名(英文) A Study on Japan's Acceptance, Modifications and Representations of Western Cultures, Focusing on the Fantastic and the Supernatural in Literature

研究代表者

下楠 昌哉 (Shimokusu, Masaya)

同志社大学・文学部・教授

研究者番号：90329532

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,100,000円

研究成果の概要(和文)：日本が近代化を進める時期に西洋から多くの芸術作品が流入し、現在に至るまでそれらは日本で様々な芸術に携わる人々の想像力を刺激してきた。その結果、現代の日本において作成される各種芸術作品には、西洋を起源とする題材の活用が多くみられる。そうした作品で用いられる題材やモチーフは多くの場合、日本に受け入れられてからある程度の変容が生じている。本研究では、主に文学作品における幻想性・怪奇性に焦点をあて、そのような題材・モチーフがいかに受容され、日本で変容し、かつ世界に向けて再発信されるかの過程を追った。研究成果は、海外出版社からの英語による論文集に収録されて刊行されるなど、様々な媒体で世に問うた。

研究成果の概要(英文)：As Japan modernized herself, a great number of Western artworks flowed into Japan, and they have stimulated those engaging with various arts in Japan. As a result, even in contemporary Japan, many artworks make use of the subjects or motifs originating in the West. In many cases, those subjects or motifs have been modified or transformed to some extents since Japan had accepted them. This study, mainly focusing on the fantastic and the supernatural in literature, treats how such subjects and motifs were accepted in Japan, were modified or transformed in Japan, and have been globally represented. The main achievements of this study were published in several collections of academic articles, published by overseas publishers, and other ones also have been published and presented in diverse media.

研究分野：英文学

キーワード：文化交流 幻想文学 大衆文化 翻訳

1. 研究開始当初の背景

(1) 本研究代表者下楠は、アイルランド出身の英文学小説家ジェイムズ・ジョイスで博士号を取得した後、同じくアイルランド出身の小説家で *Dracula* (よく『吸血鬼ドラキュラ』と訳される) の作者、ブラム・ストーカーの研究に従事し、複数の論考を出版し、口頭発表を行った。その研究過程において、日本には類似の伝承がほとんどないにもかかわらず、西洋由来の吸血鬼という形象が日本の大衆文化において大いに活用されていること、またそれが日本独自の変容をしたうえで海外に向けて様々に再発信されていることに気づいた。そこで、「クール・ジャパン」ポップカルチャーの一翼を担うアニメやマンガなどにおいて、日本独自の吸血鬼表象が活用されている現状を、英語による海外出版社からの共著 *The Universal Vampire: Origins and Evolution of a Legend*, Fairleigh Dickinson University Press, 2013, pp. 174-94 で世に問うた。日本における吸血鬼表象については内外を問わず学術的フォーラムに則った論考がほとんどなく、かつ海外に向けて英語で発信されたものはほとんど皆無であったため、この論考には内外から反響があった。

(2) 同じく下楠が平成 21 年度より 23 年度まで行った科学研究費補助金による基盤研究(C) 課題番号 21520295「民話の芸術作品への変容とグローバル化 - プリテン諸島の「あざらし女」の民話を中心に」において、物語類型としては天の羽衣に酷似しているものの、その形象においては日本に類例を見ないあざらし女の民話を取り込んだスコットランド作家フィオナ・マクラウド(男性作家ウィリアム・シャープの筆名)作品が、大正期に松村みね子(歌人片山廣子の筆名)に翻訳され、それが短編集の冒頭に据えられて版を変えつつ繰り返し出版されることにより、その西洋由来の超自然的文学形象の日本における受容に大きな役割を果たしたことに着目し、海外出版社からの共著 *Celtic Connections: Irish-Scottish Relations and the Politics of Culture*, Peter Lang, 2013, pp. 115-32 を世に問うた。

これらの研究成果を土台とし、西洋由来の幻想性あるいは怪奇性に関わるモチーフや形象に着目し、かつそれらがどのように日本に移入されてきたのか、また日本から海外に向けて再発信されているのか、について研究することについての研究計画を着想するにいたった。

2. 研究の目的

文化的ソフトがグローバルに拡散して共有される現代において、「日本発」の文化的ソフトが近年世界的に注目を集めている。本研究の目的は、西欧に由来する文化的想像力を受け継ぎつつ、それを自らのうちで鍛造して新たな独自性を獲得させ、再び世界で受容し

直させている日本発のソフトの特性を検証することが本研究の目的である。

研究対象は、近年英語への翻訳出版の体制が目覚ましく整い、西洋からの影響を長らく受けて来たジャンルである文学の作品を中心とし、海外で広く受容されている作品の幻想性・怪奇性に特に注目した。映画などの視覚メディアも研究の対象とした。また、現況の分析にとどまらず、現状を生み出すにいたった歴史的背景および過程も研究の射程とした。

研究の成果は、英語による発信を強く意識し、海外において積極的に成果を発表することを目的の一つとし、それを実施した。

3. 研究の方法

(1) 図書館からの資料の貸借・複写、データベースを使用しての資料のダウンロード、研究費による図書購入、他図書館あるいは研究施設を訪問しての資料閲覧・複写を通じて資料収集を行い、研究成果を口頭発表し、論文を投稿し、図書を編集して出版した。

(2) 基本的に座学中心の研究分野における手法を活用して研究を行ったが、「現場」にも精力的に足を運んだ。日本に幻想・怪奇文学を移入した草分けである平井呈一の活動の軌跡を追って新潟県小千谷、京都名刹三千院などを訪れ、関係者に話を聞いた。また、自身も日本への幻想文学移入の重要人物である東雅夫氏には、情報提供、現地取材、編集作業協力など、各方面でご助力いただいた。所属の同志社大学の在外研究員制度を利用してハワイ大学マノア校日本研究センターの研究員となり、ハワイにおいて学生たちが日本文学をどのように学んでいるのかを調査した。その他にも、海外における日本文化イベントや日本文学を英語に翻訳している出版社などを訪問した。こうした調査の発表に関しては、責任編集した書籍の一部や、所属の研究紀要などを活用した。

4. 研究成果

(1) 「1. 研究開始当初の背景」で挙げた共著、*The Universal Vampire: Origins and Evolution of a Legend* (2013) では、戦後日本の大衆文化においては、日本独自の「美しい吸血鬼像」がいかに確立していたかを論じた。その歴史的な流れのなかで大きな役割を果たした歌人須永朝彦の吸血鬼短編を取りあげた論文を、自らが共同責任編集をした『幻想と怪奇の英文学』(2014) に発表した。この論考「美しき吸血鬼 - 須永朝彦による西洋由来の吸血鬼の美的要素の結晶化」は、総論的であった *The Universal Vampire* 収録論文を、各論を持って補完する役割を担う論文である。また、『幻想と怪奇の英文学』は、英文学会の興隆と若手研究者に発表の場を与えることを念頭に企画編集したものであったが、完成した論集は図らずも、現代の

日本において英文学研究に携わる専門研究者たちが「幻想」もしくは「怪奇」という言葉を聞いて想起する作品群、あるいはそれらを論じる切り口のショーケースとなり、本研究が目指すところの一端を学界だけでなく一般読者にも広くアピールすることとなった。この論集で取りあげられた題材は、ジェイムズ・ホッグと芥川龍之介、西洋古典から中世の文献にかけてのアマゾン族、アーサー王伝説、初期近代イギリス演劇、アン・ラドクリフ、トマス・ハーディ、オスカー・ワイルド、フィオナ・マクラウド、カズオ・イシグロ、エリザベス・ボウエン、アンジェラ・カーターであった。なお、この論集の出版そのものに関しては、科学研究費の援助を受けてはいない。

(2)「1. 研究開始当初の背景」で挙げた共著、*The Universal Vampire: Origins and Evolution of a Legend* (2013) で始まった研究者間の交流を背景に、平成 26 年にアメリカのフロリダ、フォートローダーデイルで開催された学会、25th Annual Meeting of the Southern Region, American Conference for Irish Studies で研究発表を行い、それを足がかりに共著 *The Supernatural Revamped: From Timeworn Legends to Twenty-First-Century Chick* (2016) を刊行した。収録の論文 "An Anime Dullahan: The Irish Death Messenger Adapted in Japanese Popular Culture" では、伝承の源であるアイルランドでも現在は一般にあまり知られていない、妖精デュラハンを取りあげた。この妖精は、W・B・イェイツの翻訳によって日本に紹介された後、TV ゲームなどのキャラクターの一つとして一般に広く知られるようになった。さらに、成田良悟(イラスト: ヤスダズヒト) 作のライトノベル『デュラララ!!』の主要登場人物となり、それがさらにはアニメ化され、その作品が海外でも受容されることにより、おそらくは「世界で一番有名なデュラハン」が日本初のアニメの中で活躍することになるまでの過程を論じた。『デュラララ!!』は原作も中国語・韓国語・英語に訳されており、平成 30 年に参加した国際学会 39th International Conference on the Fantastic in the Arts においては、参加者の一部と十分に話題を共有した議論が可能だった。

(3) 西洋由来の超自然的な文学形象である吸血鬼がいかに日本の大衆文化の想像力の中に定着したかを検証するにあたっては、吸血鬼小説の最高傑作 *Dracula* (プラム・ストーカー作) を日本で最初に翻訳した、平井呈一による訳業を避けて通るわけにはいかない。しかしながら平井は、日本文学の純文学研究においては師匠である永井荷風原稿贋作事件との関わりが注目される場合が多く、その一方幻想・怪奇の文学に関わる部分では絶対的な権威とみなされており、研究対象としての扱いがなかなか難しい作者で

ある。本研究事業における平井呈一に関わる研究も、一本道とはいかない過程を経ることになった。ただし、それがゆえに平井に関するいくつかの新事実を世に問うことにも成功したと思われる。

平井研究を本格的に開始する機会は、平成 27 年刊行の共著 *Multiple Translation Communities in Contemporary Japan* への参画を編者の一人、Beverley Curran 国際基督教大学教授に打診していただいたところから始まった。翻訳文化という枠組みで考えた場合、平井呈一の訳業に関して学術的フォーマットに則った英語による論考は管見に入った限り前例がなかったため、この機会に平井の *Dracula* 訳についての論考を発表できたことは、大きな意義があった。その共著収録論文の "Hirai Teiichi, the Japanese Translator of *Dracula* and Literary Shapeshifter" では、日本における吸血鬼像確立にあたって大きな影響力を果たした翻訳家としての平井の訳業を評価する共に、複数の文人に師事することで変幻自在に文体を変える術を身に着けた平井の翻訳が、時に原文を忠実に訳すより自らが持つ *Dracula* という作品のイメージを活かすことを選んでいることを指摘し、単なる人物紹介に終わらぬ論考となることを心かけた。

この研究の内容は、アイルランドの国立コーク大学にて開催された国際学会 2016 Conference of the International Association for the Study of Irish Literatures での発表で、平井の *Dracula* 翻訳に取り入れられた日本の伝統的な芸能における話術について論じるにあたって、紹介した。

平井が使用していた *Dracula* のエディションは、現在まで特定されていない。そこで、戦時に平井が疎開し英語教員を務め、蔵書が寄贈された可能性のある、新潟県立小千谷高等学校を調査のために二度訪問した。残念ながら平井が使用した可能性のある *Dracula* は発見できなかったが、これまで知られていなかった平井の小千谷での生活の一端が明らかになった。小千谷に関わる調査でお世話になったのが、本報告書「その他(4)」で挙げさせていただいた研究協力者のみなさんである。東雅夫氏、紀田順一郎氏、堀澤租門氏、佐藤久子氏、立恵子氏に篤く御礼申し上げる。小千谷での調査の過程や結果などは、平成 28 年出版の共著『幻想と怪奇の英文学 II - 増殖進化編』に、東雅夫氏との対談の形で 405-31 頁に収録した。平井呈一の仕事について知悉する東氏との対談形式にすることにより、平井の仕事を『ドラキュラ』に限らず立体的に紹介することができ、なおかつ平井の小千谷生活のどのような部分がこれまでよく知られてこなかったのか 平井が東京に戻った後も小千谷に通い続けていたことや、小千谷の学生の前で落語を披露していたことなどをわかりやすく示すことができた。合わせ

て、予想外の喜ばしい成果となったのが、平井の教え子にあたる故佐藤順一氏が保管されていた平井呈一の書を発見したことである。故佐藤氏夫人の佐藤久子氏のご厚情を得、平井の書の一部は神奈川県立近代文学館に收藏されることとなった。同館との折衝にあたっては、同館元理事長紀田順一郎氏にお力添えをいただいた。同館に收藏された品は以下の通り。1)平井呈一書「夢」(扁額、墨、破損、470mm x 785mm) 1点、2)平井呈一書「いろはにほへとちりぬるをわかよたれそつねならむ」(軸、墨、2113mm x 787mm) 1点、3)平井呈一書「うみのおくやまけふこえてあさきゆめみしゑひもせす」(軸、墨、2108mm x 777mm) 1点、4)風炉先屏風(平井呈一書「年立や吹雪の中の雛の声」ほか短冊6点貼込)(短冊、墨、汚損、834mm x 1406mm 折畳み: 843mm x 688mm) 1点。

なお『幻想と怪奇の英文学 II - 増殖進化編』では、ジェイムズ・ジョイスの純文学作品『ダブリン市民』の短編「姉妹」が、死者の存在を強く意識した怪奇性あふれる作品であることを指摘したうえで新訳を試みた。また、前回の論文集『幻想と怪奇の英文学』よりも執筆者の数を増やし、現代の日本の文学研究者たちが考える「幻想性」「怪奇性」をよりはっきりと浮彫とすることを企図した。この論集で論じられた作家や題材は以下の通り。ジョイス、郡虎彦、メアリー・シェリー、ディオーン・ブーシコー、マット・ジョンソン、フェニックス伝説、トマス・マローリー、H・G・ウェルズ、ロバート・ステューヴンソン、ウィリアム・シャープ、尾崎翠、ルイス・マクニース、アンジェラ・カーター、オードリー・ニッフェネガー、中世ヨーロッパ奇跡譚、ジェイムズ・ホッグ、コーマック・マッカーシー、ルース・オゼキ。この論文集の出版そのものに関しては、科学研究費の助成は受けていない。

(4)平成28年9月1日より平成29年8月31日まで、同志社大学在学研究員としての研究を行った。平成28年9月1日~11月15日まではアイルランド国立ユニヴァーシティ・カレッジ・ダブリンにて研究を行った。ジェイムズ・ジョイスの作品における超自然的なモチーフを扱った研究を行った。国内研究期間を経て、平成29年1月5日~8月31日までハワイ大学マノア校日本研究センターで客員研究員として、本研究に直接関係する成果をあげるための研究に専心した。計画段階ではアメリカでの日本文化の受容の状態について社会学的なアプローチをとることも検討したが、ハワイ大学での指導教員を日本文学研究の権威、Ken K. Ito 教授にお引き受けいただいたこともあってヒトを対象とした研究は断念し、アメリカの大学において日本文学がどのように教授され受容されているのか、また英語圏において日本文学の幻想性がどのように研究されているか、に研究のターゲットを絞った。

ハワイ大学はアメリカの大学のなかでも日本研究に関しては屈指のプログラムを持ち、かつ長い歴史を誇っている。アメリカの大学において「日本研究」は様々な学問分野にまたがったエリアスタディーズ的な側面を持つのが通例で、ハワイ大学も例外ではないが、同大学では Japanese、すなわち日本語・日本文学が専攻もしくは副専攻として学べるぐらい、同分野の科目が充実してそろっている。ハワイは歴史的に多数の日系移民を受け入れ、現在でも多くの日本人が訪れるハワイでは、高い日本語能力を持つ学生、日本に関してある程度の知識をすでに有している学生の数は多い。そのせいか、ハワイ大学において日本の大衆文化を表層的に扱うような授業やイベントはあまり見られなかった。むしろ、下柄がシラバスを精査し、授業見学などを行った日本文学を扱う授業では、授業担当者たちが文学の正典、いわゆる「名作」をはずさずに扱おうと腐心しているのが印象的であった。詳細は「5. 主な発表論文等」の雑誌論文「ハワイ大学マノア校における日本文学に関する学生の学びの諸状況」に記載している通りであるが、そこで触れられなかった事柄でここで記しておくべきと思われるのは、ハワイ大学では日本研究の一環としてではあるが、「沖縄研究」も一つの分野として学内で明確に部門として独立して研究がなされていることと、マノア校のハミルトン図書館には「空手」の歴史に関して日本でも閲覧が困難な資料が收藏されていることである。

続いて、ハワイ大学マノア校での主要な研究主題である、英語圏において日本文学の幻想性がどのように研究されてきたか、について報告する。まず用語の問題で、日本語で言う「幻想文学」に完全に重なるような文学的ジャンル概念は、英語圏にはない。字義通りの訳であれば "fantastic literature" であろうが、典型的な文学ジャンルである "fantasy" と、ツヴェタン・トドロフの優れた構造主義文学理論に端を発する "the fantastic" とされる文学様式が、その定義をめぐって英語圏では1980年代に激しく論議された。その時期に立ち上げられたのが The International Association on the Fantastic in the Arts で、その学会は "the fantastic" として捉えられる作品の範疇をできる限り大きくとるスタンスを採用したため、現在では同学会において多種多様な様式とジャンルの文学や映画などが論じられている。(平成30年の大会では、アメリカ人の研究者が、英訳された日本の漫画について論じるペーパーもあった。)このように長らく文学における「幻想性」に着目してきた英語圏の学界が、日本文学における幻想性に大いに着目したのが1990年代だった。Ken K. Ito 教授にうかがったところ、様々な研究成果があいまって複合的に発生した、ある種のブームだったのだろう、ということである。

泉鏡花や円治文子の英訳の出版、後に日本のアニメ研究で名を馳せるスーザン・ネイピアの近代日本文学の幻想性を扱ったモノグラフ *The Fantastic in Modern Japanese Literature: The Subversion of Modernity* の出版、『源氏物語』の六条御息所の生霊を扱ったドリス・バーゲンの影響力ある論文 "Spirit Possession in The Context of Dramatic Expressions of Gender Conflict: The Aoi Episode of The Genji monogatari" の刊行などが、その時代の関連の主要研究成果である。そして 21 世紀初頭の宮崎駿監督による『千と千尋の神隠し』の英語圏での大ヒットが、1990 年代における日本の幻想性の研究成果を一層引き立てることになったそうである。

1990 年代は、歴史学の分野からも日本における幻想性、あるいは超自然的な存在について優れた論考が出た。それがフェラルド・フィガルの *Civilization and Monsters: Spirits of Modernity in Meiji Japan* (1999) である。この研究と前述のネイピアの共通点は、泉鏡花を同時代の日本の幻想性を代表する作家として扱っている。ただし、鏡花は死後評価があがっていった作家であり、存命中は必ずしも時代の寵児ではない。(2017 年に翻訳が出たマイケル・ディラン・フォスターの『日本妖怪考 - 百鬼夜行から水木しげるまで』(2009) は、文学では漱石や鴎外を論の中心に据えている。) 鏡花が日本で幻想文学を代表する作家としての地位が確立していったのは、ちょうど「幻想文学」という文学ジャンルがようやく日本で認知されつつあった 1970 年代・80 年代であった。そして幻想文学がある種の文学作品のクラスターとして認知されるにあたっては、日本の文壇や出版界によるものだけではなく、海外の文学作品の日本への翻訳や紹介が大きな影響力を持っていた。ここで下楠は一つの仮説を立てた。泉鏡花の作品は、鏡花の死後、西洋文学研究において "the fantastic" として理論化される文学的特性を、すでに獲得していたのではないだろうか。一見、時代錯誤的に見える仮説だが、前述のトドロフの研究が 18 世紀以降の西洋文学作品を主に扱っていたこと、「日本的」と称されることもある鏡花も明治維新後に爆発的に流入した西洋文学に他の文人たちと同じように注意を払っていたことを考え合わせれば、この仮説を証明することは十分可能と考え、その点に関して集中的に研究を行った。研究成果は平成 30 年 3 月 16 日にアメリカ、フロリダに開催された 39th International Conference on the Fantastic in the Arts において、"Writing the Fantastic in Twilight Zone: Influences of Japanese Ghost Stories and Western Supernatural Fiction in Izumi Kyoka's Fantastic Literature" として発表した(「5. 主な発表論文等」〔雑誌論文〕)。同じパネルの他の 3 人の発表者やフロアからは好意

的な反応があり、発表者間およびフロアと議論を重ねた。本発表の内容は、その際の議論を踏まえたうえで発展させ、適切な場所での出版を目指して、鋭意努力してゆく所存である。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 1 件)

下楠昌哉、ハワイ大学マノア校における日本文学に関する学生の学びの諸状況、同志社大学英語英文学研究、査読あり、2018、No.99、pp.91-113、<https://doors.doshisha.ac.jp/duar/repository/ir/26024/?lang=0&mode=0&opkey=R152507575616646&idx=4>

〔学会発表〕(計 3 件)

Masaya Shimokusu, Writing the Fantastic in Twilight Zone: Influences of Japanese Ghost Stories and Western Supernatural Fiction in Izumi Kyoka's Fantastic Literature, 39th International Conference on the Fantastic in the Arts, 2018, Orlando, United States of America

Masaya Shimokusu, An Impact of Translation: Styles and Rhythms of Traditional Oral Performances in Hirai Teiichi's Translation of Bram Stoker's *Dracula*, 2016 Conference of the International Association for the Study of Irish Literatures, 2016, University College Cork, Ireland

Masaya Shimokusu, Dullahan in Anime: An Adaption of the Irish Death Messenger in Japanese Popular Culture, 25th Annual Meeting of the Southern Region, American Conference for Irish Studies, 2014, Ft. Lauderdale, United States of America

〔図書〕(計 4 件)

Masaya Shimokusu 他、Fairleigh Dickinson University Press, *The Supernatural Revamped: From Timeworn Legends to Twenty-First-Century Chick*, 2016, 133-44.

下楠昌哉 他、春風社、*幻想と怪奇の英文学 II - 増殖進化編*、2016、16-36、405-31

Masaya Shimokusu 他、Routledge, *Multiple Translation Communities in Contemporary Japan*, 2015, 169-85

下楠昌哉 他、春風社、*幻想と怪奇の英文学*、2014、54-79、344-53、363-78

〔産業財産権〕

出願状況(計 0 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

取得状況（計0件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

下楠 昌哉 (SHIMOKUSU, Masaya)
同志社大学・文学部・教授
研究者番号：90329532

(2) 研究分担者

なし

()

研究者番号：

(3) 連携研究者

なし

()

研究者番号：

(4) 研究協力者

東 雅夫 (HIGASHI, Masao)
文芸評論家
紀田順一郎 (KIDA, Junichiro)
文筆家
堀澤 祖門 (HORISAWA, Somon)
三千院門跡門主
佐藤 久子 (SATO, Hisako)
故佐藤順一氏夫人
立 恵子 (TATSU, Keiko)
新潟県立小千谷高等学校図書室司書

以上